



みどりの風

平成29年10月2日発行
校報 第545号
〔みどりの風 第88号〕
練馬区立関町北小学校

コスモスを眺めての一考

校長 大野 泰弘

先週、9月25日(月)から28日(木)までの3泊4日、6年生と共に、武石移動教室に出かけました。期間中、天候に恵まれ、全ての行程を予定通り終えることができました。昨年度に引き続き行われた、合唱コンクールやダンス大会では、審査結果はともかく、各クラスや宿舎での部屋ごとの子どもたちの一体感や絆の深さを感じられました。そして、自然の豊かさや我が国の歴史などにもふれる活動もありましたが、目的地に向かうバスの中から見えたもの、それは、地元の上田市(旧武石村)の多くの住宅のお庭にコスモスの花が咲いている、ということでした。中には自生しているコスモスもあるのかもしれませんが、ピンク色はもとより、赤に近いピンク色、白い色など、色鮮やかに咲いていました。そのコスモスの咲き方には、住民の方々のコスモスへの何らかの思いを感じられました。そこで、帰京後に、上田市のホームページを見てみると、コスモスが市を代表する花の一つであることが分かりました。

さて、上田市の住民の方々が大事に育てていらっしゃるコスモスを眺めながら、心に浮かんだことは、4年生の国語の教科書にある「一つの花」という物語のことでした。このお話の概略は次のようになっています。

「一つだけちょうだい。」これが、ゆみ子のはっきり覚えた最初の言葉。戦争が激しかった頃、食べる物がなく、「もっともっと。」とせがむゆみ子に、「一つだけー。」と応える言葉がお母さんの口癖となりました。それを聞いていたゆみ子は、知らず知らずのうちに、この口癖を覚えてしまったのです。

そんなゆみ子の将来を案じるお父さんは、ゆみ子をめっちゃくちゃに「高い高い」するのです。

それから間もなく、あまり丈夫でないお父さんも戦争に行かなければならない日がやってきました。汽車の駅に着くまでに、ゆみ子はお母さんが大事なお米で作ったおにぎりを全部食べてしまいました。いざ出発というときになって、ゆみ子の「一つだけちょうだい。」が始まったのです。お父さんは、プラットホームのはしほの、ごみすて場のようなところに、忘れられたように咲いていたコスモスの花を見つけ、ゆみ子のもとに戻ってきました。お父さんの手には一輪のコスモスの花がありました。お父さんはゆみ子にその花を渡し、ゆみ子が喜ぶ姿を見てにっこりと、何も言わずに、ゆみ子の握っている一つの花を見つめながら、汽車に乗って行ってしまいました。

十年後、ゆみ子のとんとん葺きの小さな家は、コスモスの花でいっぱい包まれています。そこからは、ミシンの音が何かお話をしているかのように、聞こえてきます。やがて、買い物かごをさげたゆみ子が、コスモスのトンネルをくぐって出てきました。今日は日曜日、ゆみ子が小さなお母さんになって、お昼を作る日です。

(光村図書出版 四上)

この物語を読むと、いくつかの「謎」・「疑問」がわいてきますが、子どもたちにそれらをどのように示し、考えさせるかは別として、例えば、「コスモスの花が象徴していることは何か?」、「作者はなぜコスモスの花を設定したのか?」という問いや疑問です。

前者については、忘れ去られたように咲いているコスモスは「当時の人々の軽んじられてきた、大切な一つの生命」と考えられますが、後者については、今回、武石周辺のコスモスを眺めて、一つの考えが生まれました。それは、緑が多い武石の自然の中で、コスモスのピンク系の色はとても鮮やかに目に映り、目立ったのですが、一方、戦時中は、心の内面も、社会生活全般も、目に見える色自体が暗い感じがするものが多かったように思われます。そのような中で、ゆみ子のお父さんの目には、コスモスの色はゆみ子の未来を明るく灯すような、その人生に光を照らすような存在として映ったのではないかと、そのために、作者である今西祐行さんは、プラットホームの端に明るい色が際立つコスモスを設定することにしたのではないかとということでした。

私の考えはともかくとして、今回の武石移動教室では、6年生一人一人が一輪のコスモスとして明るく輝くだけでなく、学級として、また学年として、ちょうどコスモスの花が群生するように、心一つにしていました。十年後のゆみ子のお家のコスモスがゆみ子とお母さんの幸せな平和な日々を象徴しているように、6年生が、合唱をしたり、ダンスをしたり、様々な体験学習をしたりすることのできる、このような日々が続いていることこそ、とてもありがたく、貴重で、まさにお父さんがゆみ子たちに託した幸せで平和な日々なのではないかと思いました。

今月10月は読書月間です。子どもたちだけでなく、大人もお気に入りの一冊を手にし、そのお話の中に様々な問いや疑問を見出し、日常生活や自らの経験等と関連付けながら解釈を楽しむ、そんな日常をもつこともよいのではないかと思います。